



新しい 挑戦

U・I・Jターン事例集

平成31年3月発行



Uーリターン転職のススメ

生まれ育った故郷への愛着や

自然に囲まれた暮らしへの憧れ。

地方への移住を考える人にとって、

その地での転職先は気になるところ。

これまでのキャリアやスキルを活かし

被災地で新しい挑戦を始めた4人の姿から

「Uーリターン転職」について考えてみたい。



**中高年層にとっての
東北でスローライフの可能性** 4

吉田 浩 東北大学経済学研究科 高齢経済社会研究センター

**技術活かし転職
即戦力と期待され仕事を任される** 8

羽柴 麗恵さん 株式会社アルチザネットワークス 滝沢デベロップメントセンター

**自分の目と耳で
震災を確かめたい** 12

落合 孝行さん 一般社団法人りぶらす

**企業の将来を肩に
新設セクションを背負って** 16

中上 兼一郎さん 株式会社阿部長商店

**やりがいのある仕事を求めて
50歳でリ・スタート** 20

丹野 清和さん 関場建設株式会社



中高年齢層にとっての 東北でスローライフの 可能性

東北大学大学院経済学研究科
高齢経済社会研究センター
教授 吉田 浩



1 中高年層の地方移住の実態と意向

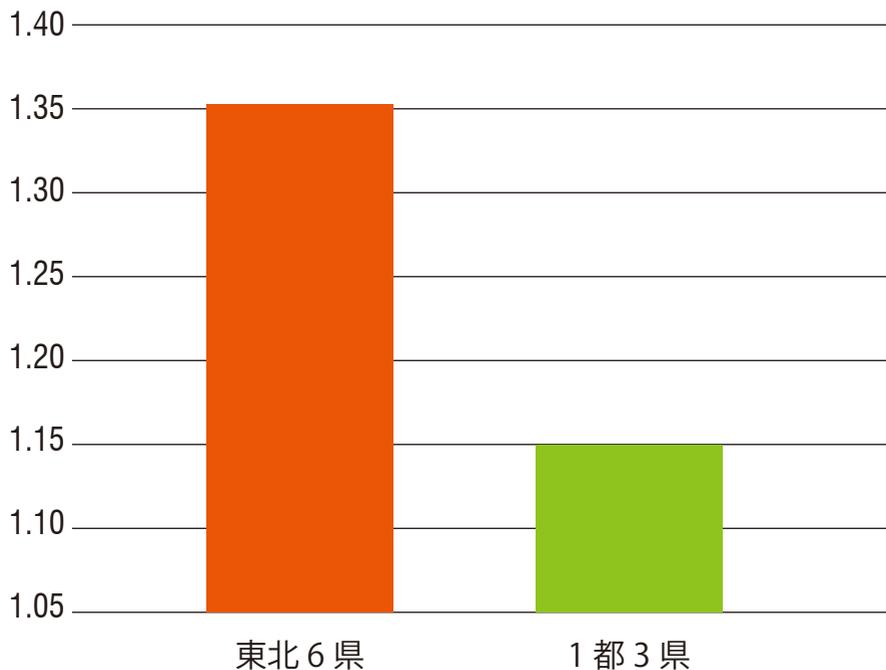
全国的に少子・高齢が進む中、東京圏への人口集中が目立っています。しかし、東京圏へ流入する人口は、主に若い世代の進学、就職が中心であり、55歳以上の中高年齢層では、東京圏から地方圏に流出する方の人口が多いという結果が報告されています（総務省「住民基本台帳人口移動報告 平成30年（2018年）結果」）。

2016年に内閣府が行った「東京在住者の今後の移住に関する意向調査」の結果によると、調査対象となった東京在住者の4割の人は東京圏から「今後移住する予定又は移住を検討したい」と答えています。このうち関東圏以外の地方出身者については、約5割の人が「今後移住する予定又は移住を検討したい」と答えています。

2 地方移住希望者の求めるもの

先に挙げた、内閣府の地方移住に関する調査から、地方移住をしたい理由（複数回答選択）についての結果を見ると、40歳代、50歳代の男性では4割の人が「スローライフ

（図1）一次・三次活動と二次活動の比率



総務省の「平成28年 社会生活基本調査」より作成。

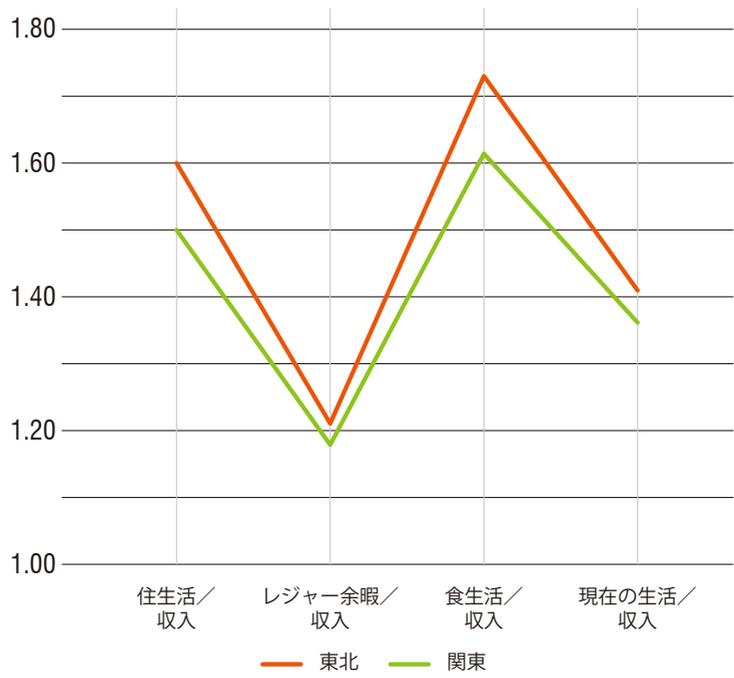
を実現したいから」と答えています。次に多い要因が「出身地だから」というもので、3割以上にのぼっています。

では、実際に東京圏で東北地方出身の人はどのくらいいるのか、そして東北地方でスローライフは実現できそうかについて、実際の統計を使って見てみることにしましょう。

3 東京圏には東北出身者が多い

国立社会保障・人口問題研究所が2016年に行った「第8回人口移動調査」では、現在東京圏に居住している人の出身地がわかります。それによると、東京圏で出生の人はおよそ7割であり、それ以外の地方圏の出生者は残りの3割程度です。この東京に居住している地方出生者3割について、さらに内訳をみると、出生地が東北である人の割合は、全国の他の地域ブロック出生者よりも高く、東京在住の地方出生者の16%を占めてトップとなっています。現在、東京圏に住む人の地方移住の候補地として東北は有力な存在であり、逆に東北にとつても、移住で迎える人の候補地として東京圏は重要なPR先であることがわかります。

(図2) 平成30年度 国民生活に関する世論調査 (内閣府)



母集団：全国の市区町村に居住する満18歳以上の日本国籍を有する者
 標本数：10,000人、有効回収数(率) 5,969人(59.7%)。
 平成30年6月14日～7月1日
 満足度：満足している、まあ満足しているを合わせたもの。

4 東北でスローライフは可能か

地方移住の要因のもう一つの項目である「スローライフ」に関してみてみましょう。スローライフに関する厳密な定義はまだ確立していませんが、そのスローという言葉のとおり、少なくとも時間的にはゆったりとした生活を送ることが挙げられます。

そこで、東京圏の人と東北圏の人で、一日の時間の使い方がどのように異なっているのか、総務省の「平成28年 社会生活基本調査」（時間の使い方の方の調査）の結果を比較してみよう。この調査では、時間の使い方を3種類に分けて集計しています。一つは食事や睡眠などの生きていくために基本的な活動（一次活動）、次は仕事や家事などの社会的、義務的な二次活動、そして個人が自由に使える三次活動です。スローライフであれば、義務的な二次活動に比べて、一次活動や特に三次活動の時間がゆったりと確保されていることが望めます。統計から集計してみる、1都3県の人々の二次活動をひとしした場合の一次・三次活動の比率は1・16でした。これに対して、東北6県の人々の二次活動と一次・三次活動の比率は1・36と2割程度高くなっており、東北でのスローライフの可能性が窺えます。

（図1）参照

5 スローライフの結果としての生活満足度

最後に、スローライフの結果として生活の満足度について、東京圏と東北を比較してみましょう。内閣府の「平成30年度国民生活に関する世論調査」では、全体としての「現在の生活」、「収入」、「住生活」、「食生活」、「レジャー余暇」などについて、満足しているかを調査しています。そこで、各項目で満足（満足十まあ満足）と答えた人の比率を収入で満足と答えた人の比率で割って、収入の満足度当たりの各生活項目の相対的な満足度を計算すると、すべての項目で東北地方は関東地方を上回っており、スローライフの結果が生活の満足という形で表れていると言えるのではないだろうか。（図2）参照



吉田 浩(よしだ・ひろし)

東北大学大学院経済学研究科
高齢経済社会研究センター 教授

95年一橋大学大学院博士課程満期退学、97年東北大学大学院経済学研究科助教授、07年同教授（現職）。会計検査院第9代特別研究官、経済企画庁経済審議会特別委員を歴任。宮城県男女共同参画審議会副会長、富谷町まちづくり審議会会長（14年現在）。著作：『男女共同参画による日本社会の経済・経営・地域活性化戦略』（13年）河北新報出版センター、『厚生労働統計で知る東日本大震災の実状』（14年）統計研究会。96年（財）家計経済研究所家計研奨励賞、06年東北大学男女共同参画奨励賞。

新しい挑戦

〔岩手県滝沢市〕
株式会社アルチザネットワークス
滝沢デベロップメントセンター

羽柴麗恵さん
はしばりえ



**技術活かし転職
即戦力と期待され仕事を任される**

株式会社アルチザネットワークスは、LTEや5Gといった次世代通信規格に対応した携帯電話基地局の性能を測定する「通信計測機」の開発と販売を手掛け、基地局の限界性能のテストにおいて世界シェア1位を誇っている。これまで、外注することが多かったソフトウェア開発を自社で行うため、2016年12月、岩手県内に開設された「滝沢デベロップメントセンター」。ここで、エンジニアとして働いているのが羽柴麗恵さんだ。

石川県金沢市で生まれ育った羽柴さんは、東京の大学で建築を学び、中でも構造工学を専門とした。数値計算のプログラミングを得意とする、根っからの「理系女子」だ。修士課程を修了後、2002年に都内の土木コンサルタンツ会社へ就職。専門性を活かし、「地震応答解析」の分野でソフトウェア開発等を担当した。仕事は好きでやりがいも感じていたが、激務が重なり大きく体調を崩した。

休職を経て復職するが、2017年秋ごろに転職を決意。岩手県U・ターンセンター東京事務所で紹介を受けて、同社の説明会に参加したのが縁で翌年1月に入社した。

「即戦力」と見込まれた羽柴さんは、最初から担当業務を割り当てられた。ソフトウェアの



**羽柴さんの
ある日の一日**

8:40 出社
盛岡市内から車で約25分かけて通勤。

8:45 朝礼
当日の作業予定や連絡事項を伝達。各自の作業をチームで共有する。

9:00 業務開始
パソコンに向かいソフトウェア開発に挑む。

12:00 昼食
昼食は毎日お弁当を手作り。デスクで食えることが多い。

13:00 業務再開
同僚と打ち合わせをしながら開発を進める。

17:15 終礼

17:30 終業
仕事の後は、さんさ踊りの練習などプライベートを満喫する。

特定の機能をプログラミングしたり、不具合を見つけて修正したり、といった作業が初めの頃の仕事だったという。

初めて知るチームプレーの喜びと達成感

同じソフトウェア開発でも、業種が違えば仕事内容はまったく異なる。専門用語もプログラミング言語も異なり、入社当初は戸惑うことばかりだったという。特に通信業界の知識が少なかつたことで、何を聞けばいいのかも分からない状態だった。先輩のほとんどが年下という環境で、「私、本当に大丈夫？」って、自問するほどでした。でも、『ここまで来たのだから頑張るしかない』と腹をくくりました」と苦笑する。

しかし、なぜか「今は分からなくても、必ずどうにかなる」と思えたのは、長年のエンジニアとしての経験からだ。与えられた案件をこなしながら用語を覚え、一つ一つ課題をクリアし、分からないことは、「周りのみなさんが丁寧に教えてくれた」と、若き先輩たちに感謝する。

自分だけで完結する仕事で、修正や障害対応も一人で行っていた前職とは違い、エンジニア一人一人が作業を分担して一つのソフトウェアを形にする同社。「まさにチームプレーです。完成したときの達成感や喜びは前職よりずっと大きいですね」と笑顔を見せる。「通信業界の

仕事がこれほど幅広く奥深いとは知りませんでした。もっと学びを深め、対応力を磨きたいです」と、さらなる成長を誓っていた。



社名は、仏語で職人を意味する「アルチザン」と「ネットワーク」の合成。技術力ある職人が手を携えて高みを目指すイメージだ。



仕切りがなく自由度の高いオフィス。

上司に聞く

豊富な経験が頼もしい チームの精神的支柱

新しい拠点を軌道に乗せるため、即戦力の実務経験者がほしいと考えていました。羽柴さんは、業界は異なるもののプログラミング開発の経験が豊かです。事務処理などの一般業務や設備管理、経理なども担える上、コミュニケーション力が非常に高く、面接時からぜひ来てもらいたいと思います。

実際の業務に入ると、理解力の高さに驚きました。初めての内容でも、かいつまんで説明すれば自力で理解してくれました。一方で分からないことは勝手に判断せず、きちんと確認する慎重さもあります。

当センターは、平均年齢29歳という若い会社なので、羽柴さんはみんなの精神的支柱です。チームが難しい課題に直面するどどんと構え引っ張ってくれ、うまく回っていない部分に気付いて調整をする力も、頼りになる存在です。今後ますますリーダーシップを発揮してくれると期待しています。



滝沢開発センター長
センター長
吉田 恭三 さん

岩手県で暮らす魅力

伝統芸能「さんさ踊り」に魅せられてーターン

羽柴さんには、岩手県しかも盛岡市周辺に移住するための明確な理由があった。それは郷土



終業後、さんさ踊りの練習に向かう。

の伝統芸能「さんさ踊り」だ。

以前の会社を休職中2年間、盛岡市で暮らしていたという羽柴さんは、初めて見たさんさ踊りに衝撃を受けたという。「踊りの美しさはもちろん、お囃子、太鼓、笛の音色……すべてがすばらしくて血が湧きたったんです」。

復職して東京へ戻ってからも忘れられず、仲間を募って団体を立ち上げ活動した。しかし、さんさの奥深さを知れば知るほど究めたくなくなる。現在のさんさのルーツである「伝統さんさ」を身に着けたいという思いが日ごと強まり、ついに移住を決心した。

こうして、岩手県のU・ーターンセンター東京事務所に相談し、同社に入社した羽柴さん。「これでさんさができる！という興奮しかありませんでした。だから、盛岡に移住して別の業種に就くことについては、何も心配しなかったです」と笑顔をみせた。

シビアな仕事もポジティブに同僚の気概に励まされる

新しい職場は、社員ほとんどが東北出身者。金沢出身の羽柴さんにとって、引っ込み思案で人見知りと思える人が多く、最初はやはり「見えない壁のようなもの」を感じたと話す。

「でも、何かのきっかけで急に垣根がなくなるんです、とことん仲良くなれるし、親切にし



キッチン付きフリースペースで、同僚と談笑のひととき。

てくれるし。おもてなし上手は、岩手の人の特長でしょうか」と話す羽柴さん。会社に着け込むのには、そう時間はかからなかった。

羽柴さんは、「仕事で切羽詰まってもピリピリしないのがとても良い環境」と語る。「大変なときこそ、みんなで笑い飛ばして乗り越えようというポジティブな雰囲気があります。シビアでハードな仕事なのに、みんなたくましいし、だから私も頑張れるんです」。

同僚に恵まれ、大好きなさんさ踊りでストレスも解消できる。「私の場合は、大都会で暮らすよりも地方で暮らす方が、人間らしくいたら

るのかもしれないね。」

生き生きと

エネルギーッシュに変身した自分

「さんさ踊りがしたい」という理由だけで、岩手県に移住した羽柴さんであったが、実際に住んでみると好きになるものはたくさん見つかったという。「山の景色、澄んだ空気、とびつきりおいしい魚介、それに日本酒。本当に来てよかった」と満面の笑顔を見せる。「特にホヤが気に入りました。なんて日本酒に合う食材なんだと感激しています」。

移住前は、自信がなくて落ち込みがちだったという羽柴さん。「これほどエネルギーに満ちて生きている実感を持てるのは、人生で初めての経験。地元へ帰省したときに会う友人や親にも、見違えるほど明るくなったと驚かれます」。晴れやかな表情には、意志と行動力で仕事も趣味も呼び込んだ強さが映っていた。



所属する「盛岡さんさ踊り 清流」は、結成 60 年の歴史ある団体。

U・I・J ターン希望者へのメッセージ

地方にデメリットはない 隠れた優良企業を探そう



特にソフトウェア開発に関しては、地方のデメリットはまったくないと言えます。むしろ、オフィスが広く取れ、静かで快適な環境で仕事ができるのがメリット。打ち合わせはビデオ会議で十分間に合います。

若手を出していく人から「地元がいい会社がない」とよく聞きますが、それは違う。知名度の高い企業は少なくても、技術力や開発力が高く優秀な企業はたくさんあります。私も利用した県のU・I・J ターンセンターは、役立つ情報が多くおススメです。

中途採用の場合は、年の若い先輩や同僚と一緒に働くケースが多くなるでしょう。年齢は関係なく、分らないことは素直に聞く姿勢でいると、自然にいい関係が作れると思います。社会経験や人生経験はこちらのほうが豊かですから、頼ってもらえる場面も多いです。

企業情報

株式会社アルチザネットワークス

所在地 / 本社：東京都立川市曙町2-36-2
滝沢デベロップメントセンター：
岩手県滝沢市菓子152-417
TEL：019-601-3080
<http://www.artiza.co.jp/>



代表取締役社長 / 床次 隆志

資本金 / 13億5,935万円

設立 / 1990年12月

従業員数 / 146人 (2018年7月現在)

事業内容 / 通信インフラ構築に使用される通信計測機及び通信インフラの保守、運用管理を行うネットワーク・マネジメント・システムの開発、販売、並びに各種通信機器の開発、販売



新しい挑戦

〔宮城県石巻市〕
一般社団法人りぷらす

おちあい たかゆき
落合 孝行 さん

**自分の目と耳で
震災を確かめたい**

一般社団法人りぷらすは、「からだづくり、仲間づくり、居場所づくり」をコンセプトに、リハビリテーションに特化したデイサービスを軸に、高齢者や障害者、その家族などを対象としたさまざまな介護福祉事業に取り組んでいる。

設立されて約2年後、新たに活動に加わったのが落合孝行さんだ。落合さんは、島根県出雲町出身。社会福祉士の資格を持ち、福祉事務所に勤務していた。新卒で入社して4年目、障害者担当として忙しく働いていた。そんな落合さんに職場の先輩が「おもしろい活動をする団体が石巻市にある」と教えてくれたのが、同法人だった。

当時、同法人の橋本大吾代表は、特定非営利活動法人エティック（東京都渋谷区）が運営する「右腕プログラム」を通じて、共に活動する人材を探していた。「右腕プログラム」は、被災地で新事業創出に挑むリーダーの事業に参画するというもので、国内外の企業や財団、個人などの連携と協力によって成り立っている活動である。それによって多くの若者が被災地の支援に向かっていた。

活動に興味を持った落合さんは、東京で開催されたマッチングセミナーに参加する。「住民主体のコミュニティヘルス事業では、介護に



**落合さんの
ある日の一日**

8:30
出勤

スタッフと今日の訪問先の打ち合わせの後、事務作業。

9:45
訪問先へ移動

10:30
ありがたい暮らしサポート
お客様宅で、「生きがいづくり」の「支援」を行う。

12:00
昼食

近くの食堂でランチ。

14:00
打ち合わせ

市内の地域包括支援センターでケアマネージャーと打ち合わせ。

15:30
デスクワーク

事業提案書などツール作成や訪問記録を作成する。

17:00
終業

なる前に健康的な身体を作ること、地域にもコミュニティが生まれるという考え方に共感し、ぜひやってみたいと思いました。決断の陰には「震災後、東北の被災地のために自分が何もしなかったことが心にずっと残ってしまいました。自分の目と耳、そして足で震災のことを確かめたかったという。

大好きな祖母の言葉に 突き動かされて

実は、同法人で仕事をするきっかけは、83歳で亡くなった大好きな祖母との最期の言葉にあったという。「祖母は毎日畑仕事をし、近所の友だちと楽しそうに語り、太陽みたいな人でした。その祖母が入院してどんどん弱くなって。ある時『したいことある?』と聞くと、『元気になる時』と言ったのです。やりたいことがいっぱいあったらどうに、何もしてやれない自分が情けなかった。そうした思いから、祖母にできなかった分、被災地の高齢者の役に立つことができればとの思いが、落合さんを同法人へと向かわせたのだった。

とはいえ、石巻は全くの未知の世界だ。「来てみたら、あの大川小学校が車で10分ほどの場所であり、ようやく自分が被災地に来たことを実感したほど。『思い』だけで来たので、最初は知り合いもなく不安でいっぱいでした」。同

法人の利用者は被災者でもある。「最初の頃は震災の時はどうでしたかなんて聞くこともできず、まずは親しくなることから始めました」。腰を据え取り組むため、住民票を石巻に移しました。「僕も石巻市民ですと最初から言えるようにし



スタジオで利用者さんとプログラム中。



橋本代表と新事業の打ち合わせ。

上司に
聞く

人との関係性づくりが
自然にできるのが強み

りがらずには、私が支援活動の際、過酷な避難生活で健康を害したり、身体機能が不自由になっていく高齢者の方を見て、理学療法士の立場からリハビリによる改善の必要性を感じて立ち上げた団体です。「石腕」となる人材を募集したところ、来てくれたのが落合君です。初めての地で慣れるまでいろいろ苦労もあったと思います。でも、今ではやりがいを見出し、いきいきと活動してもらっています。明るく笑顔で、誰でも親しくなれるのが彼の強み。

高齢者や障害者、ご家族のみなさんのほか、介護や福祉関係者などさまざまな方々と接する仕事なので、落合君がいることで安心感、信頼感につながります。これは、りがらずにも大きな強みとなっています。共に人生を歩むパートナーとも出会い、家庭を築いたことでますます仕事にも力が入るでしょう。これからも活躍することを楽しみにしています。



代表理事 理学療法士
橋本 大吾 さん

宮城県で暮らす魅力

地域に根差した活動にやりがいを感じる日々

入職して約3年、落合さんは、デイサービスで利用者のプログラムづくりや地域の活力となる「おたからサポーター」の養成など、橋本代表と共にコミュニケーションヘルス事業の運営に従事してきた。「体の働きや仕組みを、運動学や解剖学の視点から学ぶなど、新しい知識や技



利用者さんの笑顔が元気の源。

術を習得することができました」。

同法人では、リハビリは単なる機能訓練ではなく、「自分らしく生きる権利の回復」と位置付ける。デイサービスに通い、プログラムを受講することで機能回復が進み、デイサービスを「卒業」する利用者も少なくない。プログラムを経験した利用者とその家族が、同法人の活動を理解し、自ら周囲にPRしてくれるという。

「僕たちの方が利用者さんに支えてもらっている感じです。島根では、関わったはずの地域の方々の姿を思い出すことができませんでした。今は利用者の皆さん、一人一人の顔がすぐ浮かびます」。

人生のパートナーを得て 次のステージへ

昨年、落合さんにとって人生最大のイベントがあった。仙台市に住む理学療法士の友香さんと出会い、めでたくゴールインしたのだ。「仕事もそうですが、人生を共に歩んでくれるパートナーを得て、第2の人生が始まった感じですよ」。

仕事もプライベートも軌道に乗る中、「故郷の島根が大好きなので、石巻で学んだ介護福祉の事業モデルを島根に持ち帰りたいと思うようになりました」。しかし、当時、同法人のコミュニケーションヘルス事業が丸森町で採用されるなど、広がりを見せ始めていた。「島根に戻るこ



結婚を機に本籍も石巻に。

とも考えましたが、石巻にいらがらでも島根や他地域にも展開できる。むしろその方が事業としての価値も上がるのではと考えました」。

早速、橋本代表に相談し、同法人との関わりを維持しながら、フリーランスになることを決めたという。

石巻に立ちのぼる 新たなエネルギー

復興の最中にある石巻には、落合さんのように新たに住人となった若者も少なくない。「震災後、石巻に来た人たちは、さまざまな社会問題を、今の日本の制度による枠組みでは解決できないと感じています。そのため自分には何ができるかを思索しているんです」と話す。新たに石巻市民になった方々のネットワークもあり、地元との交流も活発だという。

落合さんも6人の仲間と地域密着型バンド「モノクローム」を結成し、MCとボーカルを担当している。「地元のお祭りやイベントに参加するのが最高に楽しいですね」。バンド仲間との絆があったからこそ、早いうちに地域に溶け込むことができたようだ。

体が不自由でも、高齢になっても、望む暮らしを実現していくために、リハビリに特化した事業を行う同法人の活動は、全国でも先進的な取り組みだという。「障害者の就労サポート事業にも興味を持っていて、その活動を松島町で始めたところですよ」と加える。今後は、起業に向けて準備を行うという。「祖母の言葉をきっかけにきた石巻ですが、ここに来なければ絶対にできなかった体験、出会いがたくさんあります。食べ物も美味いし魅力的な人が多いので、来て本当によかったです」と笑顔で語ってくれた。



地域イベントに演奏する「モノクローム」メンバー。

U・I・Jターンの希望者へのメッセージ

**体験でしか得られないものがある！
迷っているならチャレンジを**



前職では日々仕事をこなすだけで一杯。被災地や社会のことを考える余裕がありませんでした。そんな僕がこちらに来て、事業の立ち上げに携わり、被災地の皆さんと交流する中で、被災地の現状や社会問題、そして解決するにはどうしたらいいかなどを考えるようになりました。

かつての自分は「ボンコツ」でした。でも、石巻に来てから仕事やプライベートでさまざまな人と出会ったことで、「僕にしかできないことがある」と思えるようになりました。ここで得たことを活かし、将来宮城と島根の両方に役立つことができれば、石巻には人情味のある人が多く、食べ物もおいしいのが魅力です。今では僕にとっての「地氈」になりました。是非こちらを訪れて体験してもらいたいです。迷っているならチャレンジしてみてください。

企業情報

一般社団法人りぷらす

所在地／宮城県石巻市相野谷字今泉前 29-3
TEL : 0225-98-8957
<http://rilink.is-mine.net/>

代表理事／橋本 大吾
設立／平成 25 年 1 月 11 日
従業員数／15 人 (2018 年 12 月現在)
事業内容／介護・障がい福祉事業、コミュニティヘルス事業、仕事と介護の両立支援事業



新しい挑戦

〔宮城県気仙沼市〕
株式会社阿部長商店

なかうえ けんいちろう
中上兼一郎さん

**企業の将来を肩に
新設セクションを背負って**

宮城県北部沿岸に位置する気仙沼市が、株式会社阿部長商店のふるさとだ。目前に広がる太平洋の豊かな水産資源を使い、「水産業」と「観光業」を企業経営の両軸に据え、設立1968年（創業1961年）から、50余年の時を重ね事業展開する地域の老舗企業である。

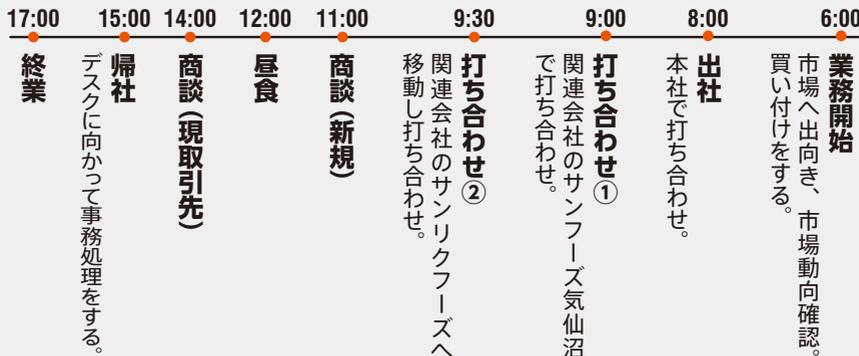
東日本大震災では、同社の水産事業が大打撃を受けた。高台にあった系列のホテル3軒も、甚大な被害は逃れたものの、受けた影響は計り知れなかった。被災直後から多くの職員は、難を逃れて、無事だったホテルへと避難していたという。

購買課長の中上兼一郎さんは、当時の状況を「震災以前は、水産業に関わる職員と観光業としてホテルに従事する職員は、グループ企業でありながら交流は少なかった。くしくも、避難所となったホテルで、初めて互いの仕事や状況を知ることになったと聞いています」と話す。

震災を機に阿部長商店社長が打ち出した新たな経営方針が、水産業と観光業との交流だった。その方針を受け新設されたセクションが、中上さんが所属する「購買課」だ。一方、この頃は埼玉県で働いていた中上さん。転職を希望し、インターネットで東北エリアでの求人情報を確認していて、阿部長商店に出会ったという。



**中上さんの
ある日の一日**



震災特需後の景気低迷 V字回復を目指す「調整役」

上司の菅原さんと冗談を交えながら話す中上さんだが、昨年1月に採用されたばかりで、同社では、まだまだ新人だ。「担当する購買課の主な業務は、ホテル厨房用の食材仕入れです。これまで、それぞれのホテルが個々に仕入れていた食材などを、集約して購入することで発生するスケールメリットを活かし、経費削減を図ってきました」という。また、水産事業部の仕入れ担当者と密に情報交換することで、最新の情報を手に入れ、それをホテル側へフィードバックできることも話す。このように、水産事業を含め、観光事業のグループ企業を、一つの企業体として新たに一元化し、営業活動や仕入れを回すことでの利点も大きいと加える。

しかし、もともと各ホテルは、それぞれが独立して仕入れを行っていただけに、心情的な配慮は必須だった。被災地での震災特需が落ち着きを見せる中、景気低迷からのV字回復を目指し「担当者に一括仕入れのメリットを理解してもらうため、膝を交えて話し合い、材料一つ一つの金額や食材内容の確認から始めています」。

中上さんの取り組みは、まだ始まったばかりだ。その状況を経営企画室の菅原さんは「入社してすぐに、現在のセクションを担当するのは、通常の人なら困難なことだと思います。」

時に、社外交渉よりも社内調整の方が難しい場合もありますので。でも中上さんは、持ち前の人間力で内外の担当者に対応してくれています」と話す。



販売スタッフと自社商品のチェック。



魚貝類や自社商品を販売する「気仙沼お魚いちば」。

上司に聞く

人間性と経験が光る
貴重な人材との出会い

弊社の主な事業は水産と観光です。この面軸をつなぎ円滑に運営することを目的に立ち上げられたのが「購買課」です。この新設に伴い、主力となる担当者として、昨年4月に入社してもらったのが中上さんです。

購買課の基本的業務は、観光部門となるホテル3館分の食材をまとめて仕入れ、従来の購買手法の改善を図り、経費削減や素材クオリティーの安定を目指しています。また、仕入れ先には、グループ内の水産事業部を主にすることで、社全体としての運営にもメリットがあります。

これらの社内改善対策は、中上さんの経験や人間性があってこそできることだと思っています。入社して1年にも満たないのですが、何年も在籍しているように思えるほど社内になじみ、こなれたコミュニケーション力と先を読む繊密な感覚は、阿部長商店の大きな力になると思います。



経営企画室
業務統括部統括部長
菅原 圭介 さん

宮城県で暮らす魅力

自分らしく生きるため 仕事もオフも全力投球

秋田市出身の中上さんは、地元で中堅の飲食関連企業に勤め、食材を卸す立場にあった。プライベートでは、その頃、メジャーなスポーツではなかったスノーボードが趣味だった。ボードからウエアまで、セットとしていくつかそろえるほ



ホテルのフロントスタッフにも気さくに声掛けする。

ど没頭していたという。そんなある日、スノーボード仲間だった職場の同僚から、長野県のスキー場再生プロジェクト参画に誘われ、転職を決意する。成果を収めたプロジェクトだったが、その後、企業の方針もありこれ以上の成長は見込めないと判断。再び転職の道を選び、埼玉県へ転居したという。

そこで出会った新たな楽しみは、登山だった。「どうせやるならと、歩きやすい登山靴にウエアなどをそろえ、気付いたら山登りの魅力にすっかりハマっていましたね」。登山ブームもあり、初心者から上級者まで、気軽に楽しめる環境整備がなされていたからと話す。

海のある暮らしと 両親への思いを抱えて

同社に就職することになったきっかけについて、「秋田に暮らす両親のことを考え、そろそろ東北に戻ろうと考えました」。しかし、中上さんは、ふるさと秋田ではなく、実家からほどよく距離感のある、東北エリアを対象に転職先を探すことにした。「秋田でも何がしかの仕事はありますが、知らない土地は楽しいものです。自分としては、日本全国各地でもハッピーでいられますから」と。インターネットで求人情報を検索し、見つけた企業が阿部長商店だった。

「ずっと日本海側にいたので、太平洋側で暮



気仙沼の食材は「鮮度とおいさが抜群だ」と中上さんは話す。

らすのもいいか、と思いました」。秋田を離れて以来、長野、埼玉と、山に囲まれて暮らす毎日だったので、海の見える生活が少々恋しくなったと話す中上さん。以前、秋田で飲食店関連の仕事をしていた時、仕入れ先の一つとして、同社の名前を目にし、扱う食材の良さを実感していたことも一因にあった。「職種も、自分の経験を活かせる内容だったので、応募させていただきました」。

ふるさとを再発見した転職 経験を糧に新たな人生設計を

ふるさとを離れ、地元を振り返り、「日本海に沈む夕日は、何ものにも代えがたい」という。「太平洋から昇る朝日も、もちろん美しい」と加えるが、ほかでの暮らしを体験しているから気付く、ふるさとの素晴らしさだ。

仕事もオフタイムもアクティブな毎日を通じて、スタッフや取引先担当者と時間を惜しんで打ち合わせをする中上さん。ところが、一人では、食事をするために飲食店に入ることができないという意外な一面もある。「飲食店で働いていた経験からか、つい、一人飯は遠慮しなればという思いになります」と苦笑する。

気仙沼市で暮らすようになってからは、大好きだったスノーボードも、登山も、未だ楽しんでいない。「スキー場再開発の仲間が、夏油高原にいたので、訪れてみたいと思っています。地域の情報を仕入れ、登山にもいきたいですね」「せっかくなので、気仙沼に来たのだから、地域コミュニティにも参加してみたい」と。

どんなことにも興味を持ち、置かれた環境に合わせて柔軟に自らを変化させる。そこには、確固たる人生観を持つ中上さんだ。「この仕事に緻密さは重要です」と話す中上さんの豪快な歩みが印象に残る。

U・I・Jターナー希望者へのメッセージ

郷に入れば郷に従え 柔軟な対応と経験への自信



転職に悩むぐらいなら、やってみればいい。やらないで後悔するより、やって失敗した方が納得できると思います。やる時には、積み上げた実績という裏付けが必要で、それがないと成功は難しいと感じます。若い頃なら、やみくもな転職もできるかもしれませんが、将来を考える年齢ですから。

私の場合、阿部長商店にお世話になる前に、飲食業界の経験があり、また企業再生という実績がありました。とはいえ、過去の成功は「必要な自信」として自分の支えにする程度にし、そこに固執するのではなく、新たな環境での柔軟な対応が大切だと思います。過去に築いた枠を取り払い、新たな枠に入れるよう、自由に変化できる人ほど強い人材はいないと思います。

私はフォークリフトや中型車両の免許も取得しています。一人で食べるには、なんとかなると思っています。

企業情報

株式会社 阿部長商店

所在地 宮城県気仙沼市内の脇2-133-3
TEL : 0226-22-1661
http://www.abecho.co.jp

代表取締役 阿部 泰浩
資本金 5,000万円
設立 1968年5月
従業員数 659人 (2017年12月現在)
事業内容 水産業と観光業、それに関連する事業



新しい挑戦

〔福島県南相馬市〕
関場建設株式会社

丹野 清和 さん
たんの きよかず



やりがいのある仕事を求めて 50歳でリ・スタート

福島県の浜通り、南相馬市にあり、1100余年の歴史を持つ関場株式会社。河川、港湾、上下水道などの公共工事を中心とする土木事業、学校や病院などの公共施設から、事業所や店舗、個人住宅の新築工事まで幅広い事業を展開する総合建設会社である。

2017年、同社に中途入社した丹野清和さんは、いわき市生まれだ。地元の高校を卒業後、東京の大手電機メーカーで生産管理業務に従事していたが、父親の介護が必要になり、Uターンする。その後、大手化学メーカーのグループ会社で東北各地の工場長を務めた。

しかし、震災の影響で工場が閉鎖。やむなく転職し、いわき市の物流拠点の事業所長となる。「50人ほどの従業員の監督をする業務で、9割が下請会社の社員。メーカーの担当者や仕事を進める状況でしたね」。丹野さんはもっと自分の力を試してみたいと考えるようになり、転職先を探し、複数の転職サイトに登録を行った。

同じ頃、関場啓代表取締役社長は、「右腕」となって、経営をサポートしてくれる人材を求めていた。というのも、震災復旧・復興事業という特需によって売上高も約200億へと増加、従業員数も60人から130人へと増加したが、特需はいずれ落ち着くと予想され、安定



丹野さんの ある日の一日

7:30 出勤

8:00 全体朝礼

総務部内で打ち合わせをする。

8:30 事務処理

朝礼の内容を文書化し社内シェアする。

9:00 社内規定の見直し

業務改善プロジェクト会議の資料作成をする。

12:00 昼食

近くの食堂でランチ。

13:00 外出

福島ロボットテストフィールドで安全指導パトロールを行う。

15:00 事務処理

現場から持ち帰った安全チェックシートをまとめる。

16:00 会議

業務改善プロジェクト会議に参加する。

17:00 終業

した経営を持続させるためには事業運営体制の見直しが必要との考えがあったからだ。さらに、次期社長への事業承継や、高齢化が進む経営陣の円滑な世代交代などの課題もあった。丹野さんと、関場社長を引き合わせたのは、東日本大震災の復興支援の一環として、内閣府が福島県にプロフェッショナル人材戦略拠点を設置、企業とキャリアのある人材とのビジネスマッチングだった。

業務改善プロジェクトの事務局として活躍

現在、総務部で事業運営や福利厚生制度の見直しなどを担当する。業務改善プロジェクトでは、情報管理部門を立ち上げ、情報の一元管理を図った。事務局として、部門の垣根を越えて社内課題や改善点を洗い出し、それらを取りまとめて、関場社長へのプレゼンテーションを行う。

そうした中、丹野さんが心掛けているのは、「全体の和を乱さないこと。一つの部署が改善された分、他の部署にしわ寄せがいくのではなく、全体が最適化されるよう目指しています」。そのため、業務改善によって得られる効果を数値で表すようにして「見える化」を手掛けた。また、月1回経営コンサルティング主催の幹部候補者研修会に参加し、時代の変化に対応した

企業経営に必要なノウハウの修得を心掛けてきた。「歴史のある会社だけによいものは残しつつ、時代に合わせて変えるべき点は変えていきたい。そのために一歩ずつ着実に前に進まなければ」と今後の目標を語る。



ダブルチェックで書類の不備を未然に防ぐ。



プロジェクト会議で資料の説明をする。

上司に聞く

若手からの信頼も厚く、活躍に期待しています。

当社では社員が10代から70代と幅広く、平均年齢は53歳となっており、若手社員と中高年のコミュニケーションが課題の一つとなっています。丹野さんが担当する業務改善プロジェクトの推進も、人と人のコミュニケーションがあったこと、若手の意見を吸い上げるために35歳以下の社員の飲み会を企画し、丹野さんにも参加してもらうなどして若手と中高年の間をつなぐ役割としても活躍してもらっています。

丹野さんの「同僚とのつながりを大切にした」との思いと、前職で最大150人の従業員を束ねてきた実績をもとに、職場環境にもスムーズに溶け込めています。人柄がよく、文書作成や資料の整理にも長けており、フットワークもよいので、現場でも慕われる存在となっています。これまでのキャリアと豊かな人生経験を活かして、社内の業務改革のリーダー的存在として、力を発揮してもらうことを期待しています。



取締役 総務部長
遠藤 信夫 さん

福島県で暮らす魅力

南相馬市・浪江町は ロボット産業の一大拠点へ

建設会社の最大の目標は「無事故」であり、同社の社是10覚にも「無事故」が盛り込まれている。普段は、社内でのデスクワーク中心の丹野さんだが、時折、建設現場での安全指導も担当している。

その日、丹野さんの姿は、「福島ロボットテ



福島ロボットテストフィールドの建設工事現場。

ストフィールド」にあった。「福島ロボットテストフィールド」とは、「福島イノベーション・コースト構想」に基づき、経済産業省と福島県が南相馬市と浪江町の約55ヘクタールに研究棟やプラントなどを建設。災害対応ロボット、水中探査ロボット、物流やインフラ点検、災害対応などに活用できるドローンといった陸・海・空のフィールドロボットを主な対象に、実際の使用環境を再現しながら研究開発、実証試験、性能評価、操縦訓練を行うことができる施設だ。2019年完成予定で、完成すれば世界にも類を見ない研究開発拠点となると見られている。

ふるさと福島の 新たな息吹を感じて

同社は、「福島ロボットテストフィールド」の建築現場で研究棟や試験用プラントなどの建設工事を担当している。丹野さんは現場で働く従業員の安全をチェックしながら、指導や意識啓発を行っている。「ここに来て、これまでにないスケールの新しいプロジェクトが始まるう」としているのを見ると、ふるさと福島の新しい幕開けの息吹を感じて、私自身もがんばろうと思います。東京での生活が長かった丹野さんは、同社に入社して、改めてふるさと福島の思いを実感しているのだという。

福島復興はまだ道半ばである。関場建設で



社員と打ち明け、コミュニケーションも円滑だ。

は、復興基盤工事という圃場ほじょうや住宅地の整備工事、河川の護岸工事、防災林の整備工事、除染など、多くの復興関連の現場を抱えている。「建設業は、復興の最前線に関わる仕事であり、それだけにやりがいのある仕事です。私もその一端を担うことで、少しでも復興のお役に立てればと思います」。

歴史ある「関場建設」を 次代へと継承するために

現在、いわき市に家族を残し、南相馬市に単



3年前に始めたバイクが、今は一番の楽しみ。

身赴任中の丹野さん。「いわきとは車で1時間ちょっとなので、週末には必ず帰ります」。平日は、夕食を兼ねて同僚と飲みに行くこともあるとか。そんな丹野さんの息抜きは、バイク。「風をじかに感じるのができて、自然との一体感を味わえるのがいいところです」。愛車ホンダシャドウファントムでバイク仲間と栃木あたりまでツーリングに出かけることもある。何事にも慎重派だけに、決して飛ばし屋ではなく、常に安全運転第一を心がけているという。

入社して現在1年余り、「関場社長にさまざまな提言を行なう中で、共感いただき、実現に向けて動き出すことが決まった時など、やりがいを感じます」。また、「業務全般のこともようやく把握できて、コミュニケーションも取れるようになってきました。これまでの業務経験で身に着けたものを発揮して、歴史ある同社を次代へとしっかり継承できるように役割を果たしていきたい」と意欲を見せる。

U・I・Jターナー希望者へのメッセージ

自らの限界を決めない チャンスは必ずあります



私の場合は、親の介護のためにふるさとにUターン後、震災の影響で転職を余儀なくされ、現在の会社と出会いました。人生設計は変わりましたが、今は当社のような安定した企業の社員となつて、ふるさとの復興に少しでも携わることができてよかったと思います。特に南相馬市では「福島イノベーション・コースト構想」が本格的に稼動しており、県内外から期待が高まっています。多くの人材が必要とされ、新卒、中途問わず意欲のある人を求めています。当社では70代の先輩もバリバリ働いておられますので、私などまだまだという気がしています。「転職は若い人でないと」と思っていないせんか。人生100年時代、仕事が人を輝かせてくれます。「転職」に目を向ければ、地元にもやりがいのある仕事は必ず見つかります。あきらめずに頑張りましょう。

企業情報

関場建設株式会社

所在地／本社：福島県南相馬市原町区錦町1-1
TEL：0244-25-2525
<http://www.sekiba.co.jp/>

代表取締役社長／関場 啓

資本金／8,000万円

設立／1907年4月

従業員数／168人（2016年12月現在）

事業内容／建築事業、土木事業、環境関連事業、生活関連事業





問い合わせ先

復興庁雇用促進班

TEL. 03-6328-0274
